

日蓮宗の現状と教化活動の組織化

第五分科会は「日蓮宗の現状と教化活動の組織化」というテーマに基づいて四十二名の出席者による討論がなされた。

先ず静岡の中野文海師より「本宗の現状を凝視して」
〈資料〉日蓮宗の見直し、点検、分析を「昭和五十一年度宗勢調査報告書」を基にして述べられた、その中で二つの提言をされた。

I 僧風教育の充実と強化

僧風教育については特に立正大の現状にふれ宗門としての高等教育機関に於ける僧風教育の確立と合わせ現任職の教育の急務を強調した。この提言に対し出席教師から宗門の現状を分析しながら僧風教育全般にわたって問題点を指摘する発言があった。

法灯継承では檀家一〇〇軒以上の優等寺院の子弟に血縁型が多いと報告書にあるが、親が子に真に発心さ

せ清澄寺で得度させているか疑問である、また谷中学寮に入寮した寺院の子弟が寮の清規に耐えず出てしまふ現状などから家庭に於ける僧風教育の不徹底な面が出された。現代に於いては仏教がますます伝わりにくくなっているという事実の中で私達教師に出来る教化が可能な条件として「私の生き方を見て下さい」というしかないのではないか、思想とは生きる原理である。「私はこの思想を生きる原理にしております」ということが基本にならなければ教化は出来ないのではないか、この生き方こそ私達の基本でなければならぬ、との見解が提起された。

立正大に関して出された意見を要約すると、もはや立正大には建学の精神は生かされていない、青山学院大から神学部が分離したように本宗でも立正大より宗学科を切り離し身延山に移転した方がよい、キリスト

教の神学部は六年制であり、本宗でも正規の四年の外に一・二年のインターン制を導入し、法華経と日蓮聖人の精神を十分に教えることは勿論、法式声明、布教伝道の方法、技術をマスターさせ、青年僧侶の自覚を養って社会に送り出してはどうか、その場合全寮制とし寮の管理を充分行なう必要がある。

このことにより真に僧風教育が確立するならば課金を増やしても同意が得られるのではないか。望ましい方法として以上のような意見が出された。

暫定的には立正大に対し建学の精神を高揚してほしいし、学生募集のポスターに仏教学部を一番下に記入してあるが竜谷大のようにトップに記載してほしい。また熊谷に仏教学部が移転した時点で寮制となることだが、寮は宗門の運営とし管理並に僧風教育を充実してほしい。礼拝堂も是非建てなくてはならないとの意見が出た。

現職教師、新任職の教育について次のような意見が出された。

私達は「教化する」とか「教化活動をしなければならぬ」と義務感から教化活動をする。これは考え直さなければならぬ。

「力あらば一文一句なりとも語らせ給うべし」の祖訓を押し、「教化活動をせずにはいられない」という使命感が基礎になっていなければならぬ。使命感がないと興味本位な内容や布教のテクニクのみで落ち込みやすいのではないか。教化活動は自らの求道であることを忘れてはならない。

ある出席者は、制度として社教・修法・布教の三会有るが全々動いていない、布教師の辞令をもつていながら一回も布教したことがない者がいると指摘した。逆に各寺院の受け入れ体制が悪く布教に行っても檀信徒が聞くのを遠慮する傾向もみられ、やはり住職が指導して受け入れ体制を造るべきだとの意見もあった。

これらの意見に対して静岡の出席者から、「私の管内では宗務所で布教師の義務として各寺院に派遣している、旅費は宗務所負担、お寺から謝礼金として千円が二千円、今の時代出座の役僧でも二万も三万ももらっているが布教することが報恩だと思って各布教師は誇りを持って布教している。布教しない布教師など考えられない。現代はクリーニング屋さんの組合でもどうしたら仕上がりが良いかとかと研修会を開いている時代だ。それにくらべると僧侶は勉強不足だ」との発言もあった。

福井からの出席者は北陸という保守的な土地なので檀信徒を増やすのはむづかしいが、布教師会は活発に活動している、全寺院へ布教師会長の名前で手紙を出し、布施の安い高いは一切関係なくどうぞ受け入れてほしいと訴えている、各寺院は積極的に受け入れてくれている。寺院の布教だけでなく街頭布教、少年少女の修養道場も布教師会が毎年行っているとの具体的な発言もあった。

貧困寺院、増え続ける過疎地の寺院の悩み、そこから出された統廃合や都市への移転、青少年活動の活発化等の問題について、宗門の持っている中央集権的な要素を改め、地域活動の充実を計るため権限の地方委譲並びに財政的な援助を求める発言もあった。

その他現職教師、新任職の教育や大僧都以上の僧階が全体の五五%以上を示している「高僧宗団」について僧階昇叙の問題など全般的に亘る本宗の僧風教育についての活発な意見があった。

II 宗門の組織、体制を伝道宗門にふさわしいものへ
今回の教研集会の問題提起に宗勢調査よりの統計が用いられている点は注目に値する。

しかしこの統計の数字は本当に信用出来るかどうか

問題になった。特に檀信徒数に大きな疑問が出され課金にはね返ってくるので内々に報告しているのではな
いかという意見が多かった。報告書自体も全々活用されて
いない。もっと効果的に用い、分析し時代に応じた
方法を研究し実施し、組織や体制を伝道宗門にふさわ
しいものにしてほしいという意見があった。又組織、
制度はあってもバラバラの印象をうける。例えば布教
研修所を出ても布教師にはなれないし、教材不足なの
に院にあるフィルムを一般寺院は借りることも出来ない
などの点は組織や制度の硬直が原因ではないか、も
っと柔軟な運用をしてほしいとの意見もあった。

III 教化センター設置、今後の中央、地域教研集会の
あり方について

第五分科会第二日目は教化センター作り、教研集会
のあり方について活発な意見の交流があった、先ず「日
蓮宗の現状と教化活動の組織化」(資料)の問題提起を
愛知の江本師が発表。つづいて討論は五、六名のグル
ープ五つに分けて行なわれた。

討論に入る前に実動して二年目をむかえた東京西部、
教化センターの報告を受けた。

それによると自主的に組織し宗務所の理解と援助を

受け発足した、中心メンバーは大変熱心に活動しており、管内一六〇ヶ寺の現状を把握する為機関紙「教化情報」を発行、お盆の施本、「引導文聖語文例集」の刊行などや各寺院と手を取り合つて組織的に活動していると報告された。

宗門は今七〇〇遠忌を目前にむかえ全国各地の寺院で何らかの記念事業が行なわれている、その金額を総合計すると百億は超えるだろう、壮大な殿堂寺院によつて景観と權威を示し僧侶は布教伝道の人というより経営マン化しつつあるのは否定出来ない。これは宗門だけでなく既成教団全体としての傾向である。そして私達僧侶も肉食妻帯し「やっぱりお金がほしいのだ」という現代の価値観と少しも違わないところに立っている。私達は第一に自らを赤裸々に反省しさんげし姿勢を正すことから始めなくてはならない。

もちろん誇りと情熱を持ち昼夜布教伝道に精進していく教師も多いが、私達教師は個々バラバラな状態におかれている。

誰が教化の方法を教えてくれるのか、悩み苦しむ信徒を助けられない教師の苦しみを誰が聞いてくれるのか、誰が教化の失敗を受けとめてくれるのか――。

「心のつながりが教師と檀信徒の間になければ教化は不可能だ」と聞くが、心のつながりをいかに作りのぼして行くか、教化上の個々の教師の疑問にどここの組織や制度が親身になって答えてくれるか、それは上下関係ではない、仲間の関係においてはじめて解決する、ここに教研会議の意義、必要性がある、との意見が数多く提出された。

① 教研会議の今後のあり方について

イ 自主性を大切にしたい、現在は院が援助するという行政指導も加わったが自主性は失っていない。制度で定めてしまうと若々しい情熱ある教研にはならない。

ロ 宗務区単位で開いて行くのは無理が出て来る、将来は県単位で行ない地方の実情に合わせて討論を深め、それを中央教研に持つて行くのが望ましい。

ハ 地方は地方で、中央は中央で統一テーマを定め、地方では二つのテーマで開催し討論しそれを中央教研に持ち込み再び討論するのがよい。

ニ 教研会議や教化センターについてもっと啓蒙すべきだ。

② 教化センターの設置について

センターは必要であり作りたいが、先ず財政難、人材難や地方地方に応じて困難な条件がある。実動しているセンターもいろいろ困難な面もあったがそれらを克服して努力している。それぞれの地方の実情に合わせて設置して行くべきだ、その時出発は我々の手で運営して行くという自主性を大切にし将来は援助を得てゆく方向で進むことが確認され次の決議を発表した。

決 議

教化センターは住職教師が相互に協力し合い、教化活動の組織的な推進を図り伝道宗門づくりをめざして行く教化交流の場であり、教化活動の実例情報や要望課題を出し合い日常の教化に活用できる資料教材の収集貸出し紹介および作成配布を行う実動の場を実現しよう。

教化研究会議は布教教化について教師が相互に交流討論し、学び当面しているさまざまな問題を取上げ、現代に対応する教化のあり方を研究し教化上の悩みや問題点をさぐりそれをどのように打開すべきかを皆で考え話し合い、伝道宗門の確立をめざし布教の意見、要望を宗門に反映させる会議です。我等教研会議に出席し教化のあり方を学び教師僧侶としての責任を果そ

う。

昭和五十四年十月三日

第五分科会一同

△佐治恵暁▽